

エラスムスの ΝΗΦΑΛΙΟΝ ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ(1529)について

木ノ脇 悦郎

今回、ここに訳出する対話、ΝΗΦΑΛΙΟΝ ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ すなわち「素面の饗宴」は、1529年9月新版の『対話集』に収録された三つの対話の一つである。他の一つは Diluculum、つまり「黎明」と、もう一つの対話は Ars Notoria（「学びの方法」）である。この三つの内、今回訳出した「素面の饗宴」と「学びの方法」は、いずれも人文学者としてのエラスムスの立場と彼の好みを明らかに示しているものであり、ルネサンス教育家たちの理想をも示しているという点において一致したものといえる。

ところで、「饗宴」という表題のついた対話は、エラスムスの『対話集』の中に、この作品を含めて5作ある。1522年版の Convivium Religiosum（「聖なる饗宴」）、1523年版の Convivium Poeticum（「詩的な饗宴」）、1524年版の Convivium Fabulosum（「架空の饗宴」）、そして、この「素面の饗宴」と1522年版初出の Convivium Profanum（「世俗的な饗宴」）²である。

今回取り上げた作品の饗宴と内容的に最も類似性を持ったものは「聖なる饗宴」である。まず、対話の場所の設定が美しい庭園であることが上げられる。次に、「聖なる饗宴」では登場人物はホスト役を含めて5人となっているが、

- 1 この作品については、抄訳と若干の注を付けてすでに発表したことがあるが、未完成であり、今後全訳を予定している。しかし、対話全体の構造は理解できるので、参考とすることは出来る。拙訳「エラスムスの *Convivium Religiosum* (1522) について」『福岡女学院短期大学紀要』第20号、p. 1-29
- 2 この作品については、1518年11月版に最初に掲載されたものと認められるが、この版についてエラスムスは、そのほとんどのものは自分の作品ではないと抗議し、書き直して新たに出版されたのが1522年版であるとされている。以来、この版を正版として用いるようになっている。(Tr.) Craig R. Thompson, *The Colloquies of Erasmus*, Univ. of Chicago Press, 1965, p. 555, 591-592参照の事。

4人の客人に対し自分の影を連れてくるように要求し、合わせてムーサの神々と同じ9人の饗宴を開いている。それに対して「素面の饗宴」では、10人の人が登場することになるが、ホスト役のArbertusを除くと9人であり、ここにもムーサの神々の饗宴を思わせる設定がなされていると言える。しかも、それぞれの発言内容は教訓的、あるいは倫理的であるという点でも共通している。これは、エラスムスの最も好むところであり、言語の学習に用いるテキストについても内容が倫理的、建德的であることを論じていることを考えると³、ラテン語学習のためのテキストとして書かれた『対話集』に同じ傾向を持った作品を入れていることもうなずけるものである。

特に、エラスムスが好んで用い、引用する古典作者のうち道徳的な内容についてはプルタルコスのものが最も優れているという理解が見られる⁴。事実、この対話の中で語られる話者たちの台詞の中に『警句・格言集』の中に納められているプルタルコスの言葉が多く引用されていることからそのことは証明されるであろう。

ところで、饗宴つまりギリシャのΝΗΦΑΛΙΟΝ ΣΥΜΠΟΣΙΟΝとは、エラスムス自身の『格言集』によれば⁵、それは特に質素な食事や酒拔きの食事が用いられることから来るものではなく、アテネでこの形式が用いられるのはムーサたちの母であるムネーモシユネー、オーロラ、太陽、月、ニンフ、ヴィーナス、あるいはアフロディーテーに奉げられる祭儀で用いられるものである。こ

3 De ratione studii, *Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia*, Tom. I, (ed.) R. J. Clericus, Leiden, 1703 (Rep. in 1961) p. 524-525 (以下、この版をLBと略記する)

4 例えば、1531年3月にバーゼルのフローベ書店から出版された *ΑΡΟΦΗΤΗΓΜΑΤΑ* (『警句・格言集』) を、Clevesのウィリアム公に献呈するに際して書かれた献呈の辞 (Ep. 2431) に次のような文言が見られる。Nullus enim extitit inter Graecos scriptores Plutarcho, praesertim quod ad mores attinet, sanctor aut lectu dignior. (ギリシャの作家の誰も、特に徳に関してプルタルコスほど崇敬すべき者や読む価値のある者は誰もいない) と。非常に高くプルタルコスを評価していることが分かるし、実際エラスムスは彼の作品のラテン語訳もしており (LB, Tom. V., p. 1-84)、それぞれの作品をイギリスのヘンリーVIII世や枢機卿トマス・ウルジーに献呈している。

5 Adages, II ix 96, *Nephalium sacrum*, *Collected Works of Erasmus*, Vol. 34, Univ. of Toronto Press, 1974, p. 127 (以下、このシリーズはCWE, Vol. 34と標記する)

の祭儀では、酒のお神酒を注ぐことをせず、蜂蜜を混ぜた水を用いたという。つまり、神々を讃えるのに酒を用いなかったのである。その祭儀の後で共に食事をし、共に飲んだという故事から来ているという。

事実、この対話の中では、酒だけでなく食事も質素な様子が伺われるのであり、エラスムスがこの饗宴に神々を讃えるものとしての性格を与えていることがうかがい知れるし、そのことを通じて、道徳的な知識の重要性を同時に示そうとしていることをも理解できるのである。

話者については、他の対話と違いどの名前を持った人が誰に相当するののかということを示すような仕組みが特に施されているとは考えられないのであるが、R. Smithによれば⁶、ペルージアのリッカルド・バルトリエ⁷、カレル・ウーテンホーベ⁸、エミリオ・エミリ⁹やリストゥリウス¹⁰のような人々が想

6 R. Smith, *A Key to the Colloquies of Erasmus*, Harvard Univ. Press, 1969, p. 51 参照。

7 Riccardo Bartolini (1475-1529)、ペルージアで生まれ、同地で神学教育を受ける。1504-06年まで、叔父の Mariano Bartolini がマクシミリアン I 世宮廷に教皇使節として遣わされると、彼も共にドイツに渡るが、後にペルージアに帰り、ラテン語、ギリシャ語の教師としても活躍している。多くの人文学者と交わり、特に彼の古典ラテンの知識は歴史的資料としての価値の高いものであったといわれている。この対話では、Bartholinus ということになるだろうか。(ed.) Peter Bietenholz, *Contemporaries of Erasmus: A Biographical Register of the Renaissance and Reformation*, Vol. 1, p. 97-98 参照。

8 Karel Uutenhove of Ghent (?-1577)、1524年ごろまでに、ルーヴァンの三言語学寮に送られ、そこで学ぶ。1528年にはバーゼルに移り、エラスムスに迎えられている。エラスムスはこの静かな青年をすぐに気に入ったという。その友情関係は長く続いているが、特にイタリアへ研究を続けるために出かけた時には、エラスムスがヴェニスやパドヴァの友人たちに暖かい推薦状を書いている。1531年以降はガンにもどり、公的な生活に奉げた。エラスムスは1529年3月版の『対話集』に新しく創作した ΑΣΤΡΑΓΑΛΙΣΜΟΣ sive Talorum Lusus (「さいころ遊び」) という作品に Carolus という名で彼を登場させ、彼を讃えている。ここでは Carolus に当てられているのだろうか。Op. cit., Vol. 3, p. 362-363

9 Paolo Emilio (?-1529)、ヴェローナの生まれで、パリで神学を学び、後ノートルダムの司教座聖堂参事会員となり、古典的なモデルに従って『フランスの事跡』4巻を著している。エラスムスはこの歴史を高く評価しているし、また彼の学識と信仰をも讃えていた。Aemilius が彼を指すものであろうか。Op. cit., Vol. 1, p. 429

10 Gerardus Listrius (?-1522)、生年は不明。ユトレヒト近郊の生まれで、ディベントラーで教育を受けた後、ルーヴァン、ケルンでも学び、パヴニアで医師となっ

起されるという。それでも、名前に何か工夫が凝らされているとすれば、アルファベット順にそれぞれ ABCDEFGHIL の頭文字を持った人物が順番に発言しているということになろうか。

しかし、この対話は非常に短いものであり、それぞれの話者の間での対話から成り立っているというより、それぞれに自分の好みの話題を提供するような形式で進められており、いわば『警句・格言集』からの引用で成り立っているということが出来る。ギリシャ、ローマの古典に精通し、その知識を自家薬籠中のものとして自由自在に用いるエラスムスの面目が躍如とした作品といえよう。翻訳に用いた底本は *Erasmii Opera Omnia*, Tom. 1-3, Amsterdam, 1972. p. 643-646 (以下、ASD. 1-3, p. 643のように記す) と LB. Tom. 1, p. 847-849である。

「素面の饗宴」

Albertus, Bartholinus, Carolus, Dionysius, Aemylius, Franciscus,
Gyrardus, Hieronymus, Iacobus, Laurentius¹¹⁾

Alb: 皆さん、これまでにこの庭園ほど魅力的なものをご覧になったことがありでしょうか。

Bar: 幸運の鳥¹²⁾でさえ、それ以上に快適とはとても思えませんね。

Car: 実に、神様がアダムをしてその見張り人とも居住者ともされた天国を見

た。さらに医学を学ぶためバーゼルに滞在中にエラスムスと知り合うことになり、ギリシャ語の知識でエラスムスに貢献している。例えば、1514年に出版されたプルタルコスのラテン語訳のタイトルページにいくつかのギリシャ語の詩を書いたり、1515年版『格言集』の改訂をしたりしており、エラスムスは多くの友人たちにあてた書簡の中で、リストゥリウスのことを賞賛している。この対話中の Gyrardus が彼に最も近いと考えられるだろうか。Op. cit., Vol. 2, p. 335

11 本文中で台詞を語る人物名は、最初の3文字で省略し、Alb, Bar, Car, Dio, Aem, Fra, Gyr, Hie, Iac, Lau のように記す。

12 死後の祝福された神話的な住居で、ギリシャのはるか西に位置しているとされ、しばしばカナリヤ諸島と同一視されることもある。その初期の伝承についてはヘシオドスやピンダロスの作品の中にも現れている。

ているようです。

- Dio: ここに来れば、例えネストル¹³やプリアムス¹⁴でさえ若返ることが出来るそうですね。
- Gyr: 私も、出来ることなら、あなたの誇張した言い方にもっと喜ばしいことを何か付け加えたいものです。
- Hie: すべてが全く素晴らしく、目を惹きますね。
- Iac: この庭園を讚えるために、何か飲まなければいけませんね。
- Lau: ヤコブスさんのおっしゃるとおりです。
- Alb: この場所は、かつてはそのような儀式で崇められてきたのです。しかし、もし飲まないで宴を開くこと¹⁵が皆さんのお気に召さないようでしたら、皆さんに差し上げる昼の食事は何もないということをご承知おきください。私は、塩も酢も油もなしにレタスを差し上げなければなりません。この井戸から出てくるもの以外には一滴の酒もございませんし、パンや杯さえもございません。今は、一年の内で胃袋よりも目を楽しませる季節なのでございます。
- Bar: でも、遊び用のダイスやボールはあるのでしょうか。宴会がだめだというのでしたら、せめて楽しく遊んで庭園を讚えましょうよ。
- Alb: こんなに素晴らしい人達が集まったのですから¹⁶、遊びと呼んでも宴会と呼んでもよろしいようなことを何かすることにしましょう。それが、

13 ホメロスの「イーリアス」に出てくるピュロスの領主でギリシャ軍の最長老、老政治家。

14 ネストルと同様、「イーリアス」の中では非常に高齢で、温厚、深切、敬神の心篤い老王として描かれている。いずれも高齢の代表者として描かれている。

15 原文では *ἄσπιον* *compotatio* と標記されており、「酒拔きの宴会」という意味になる。『格言集』(I iii 3)によれば、*citra vinum temulentia* (酒拔きの酩酊)に次の説明が加えられている。ギリシャ語の *ἄσπιον* *μεθην* のことで、ブルタルコスの「卓話」の中では、散髪屋における絶対禁酒の酩酊状態を指すという。なぜならば散髪屋に座っている人々は、何もすることなく心に浮かんだことを何でも喋り散らし、それに酔っているからである。それは丁度呑み助がそのグラスの中に言葉が入ってでもいるかのように、のべつしゃべりまくり、最後にゴクンと飲み込むような様子に似ているからであるという。

16 9人のメンバーを、ここでもムーサの神々に例えていると思われる。

この庭園を崇めるためにはふさわしいように思えます。

Car: はて、どういうことでしょうか。

Alb: それぞれが、皆さんを楽しませるものを持ち寄るのですよ。そうすれば、立派に楽しい宴会になりますよ。

Aem: 何を持ってくればよいのでしょうか。私たちは手ぶらでやってきたのですが。

Alb: 手ぶらですって。皆さんはとてまたくさんの素晴らしいものを心の中にお持ちじゃないですか。

Fra: お考えになっていることに期待しましょう。

Alb: この7日間に読んだ最も優雅なものを皆さんに披露するというのはいかがでしょうか。

Gyr: 良い思いつきですね。それ以上こんな集まりや、主催者であるあなたや、この庭園にふさわしいものはありません。この集まりの主催者であるあなたに私たちはみんな従いますよ。

Alb: それでしたら、私も遠慮ないようにしましょう。キリスト教徒でない人からキリスト教的な言葉を聞くことが出来る¹⁷今日という日は、何と私の心を喜ばせてくれることでしょう。

例えば、アテネ人たちのうちで、その人ほどに良心的で、公共の利益のために熱心だった人はいなかったほどのフォキオンが、人々の嫉妬のために有罪判決を下され、ドクニンジンを飲もうとした時に、友人たちが「息子さんたちに何か伝えることはないでしょうか」と訊ねたのです

17 このような発言によって、エラスムスは重要な示唆を与えようとする。例えば、「聖なる饗宴」でも、異教的な哲学や文学がキリスト教的な教えに反するものではなく、むしろその精神においてキリストの教えに合致していることを述べているし、彼の神学的著作である *Ratio verae theologiae* (『真神学方法論』) において「プラトンやセネカの文書の中で、それがキリストの教えと和解し難いものではないことが経験できる。また、キリストの生とソクラテスの生とが一致することも経験することが出来るであろう」(LB, Tom. V, p. 92) と述べていることも、このことを示している。このような姿勢は、一人エラスムスのみならず、ルネサンス以来の人文学者たちに等しく見られるものであり、この対話における何人かの話者と思しき人文学者たちにも共通の理解であったといえる。

が、彼はこう答えたというのです。「この不法を心に止めてほしいということ意外は何もありません」と¹⁸。

Bar: これほど際立った忍耐の例は、今日ドミニコ会士やフランシスコ会士の中にも見当たらないでしょうね。私たちは、このような人と等しくなることはとても出来ませんので、似たような人のことを報告することになります。フォキオンに似た人というのは、アリスティデスのことなのです。人々が「正義」というニックネームを彼に与えたほど、その性格において実に潔白な人物でした。ところが、そのニックネームに対する妬みの故に、国家にとって最も相応しいこの人は追放に処せられたのです。要するに、この人は常に人々のために働いており、「正義」というニックネーム以外人々に不快なことは何もなかったことを知った時も、彼は平然としていたのです。そこで、追放の最中に友人から最も不愉快な市民たちに対して何を望むか訊ねられて、彼はこう答えたのです。「アリスティデスが彼らの頭に思い浮かばないことほど幸せなことは他に何も無い」¹⁹と。

18 Phocion は、アレクサンダー時代のアテネの将軍、政治家であったが、アテネの軍事能力が過去のものであることを悟っていた彼は、平和論者として力ある雄弁をふるっていた。しかし最後は反逆罪の疑いで死刑を宣告されている。そのようなフォキオンの言葉をエラスムスは、『警句・格言集』の中に集めている (LB. Tom. IV, p. 219-221)。そのうち、XXI 番に次のように紹介されている。(LB. Tom. IV, p. 221)

ニコクレスがフォキオンに毒を飲ませるようになった時、フォキオンは言った「例えこれが苛酷なことであろうとも、その生涯において否定されるべきものが決してなかった人にとっては受け入れるべきものである」と。フォキオンは信頼すべき友人の中でも特に彼を愛していたし、彼にとってニコクレスが動揺するのを見ることはいやなことであった。彼はニコクレスが生きるためにこの苦勞を自ら背負い、まず自ら毒を飲んだのである。このことにおいて、彼は友情を示したのであった。

19 アリスティデスはアテネの政治家で正直さの故に有名であった。『警句・格言集』の第5巻はブルタルコスの言葉を集めてあり (op. cit., p. 229-272)、その中にこのアリスティデスの言葉が示されている。Quum ille negasset se nosse, moleste tamen ferre, quod Justus cognomine diceretur (自分のよく知っていた者を否定するというのは、彼が「正義」というニックネームで呼ばれていたからである) と。Op. cit., p. 244

Car: たとえ、それがどんなに軽い不正であっても、それに対して激怒したり、何が何でも復讐を遂げようとするのに対して、自分を恥じようともしないキリスト者があることは驚くべきことです²⁰。ソクラテスの全生涯を見てみますと、節度と寛容の模範以外の何ものでもないように思えるのです。ところで、この饗宴にあまり寄与することにはならないかもしれませんが、以前私をととも喜ばせたひとつの話をご紹介しますにしましょう。

道を歩いている時に、ある悪漢がソクラテスに拳骨で殴りかかったのです。彼が黙って耐えているのを見て、ある友人は復讐するように促しました。するとソクラテスはこう言ったのです。「私を殴った奴をどうしましょうか」。友人は「法廷に呼び出すべきですよ」と答えます。すると、ソクラテスはこう言ったというのです。「冗談じゃない。もしロバが私を踏みつけて私が怪我をしたら、あなた方の証言でロバを法廷に引っ張っていくというのですか」と。その意味は、次のようなことなのです。つまり、その悪漢は決してロバよりも優れた者ではないということですし、また野獣のような動物から手に入れたような精神錯乱した人間の暴力を耐えることができないというのは最低な心だということなのです²¹。

Dio: ローマの記録では、節度に関する例はもっと少なく、しかもそんなに注意を引くものでもありません。というのは、もし誰かが自分が打ち負かした者を大切に扱ったり、傲慢な者を打ち負かしたとしても、だからといってその人が寛容であるというような称賛を得る等という事は考えら

20 この句は、エラスムスがキリスト教社会における平和を求める時にしばしば用いるものであり、キリスト教君主や教皇などの引き起こす戦争が、つまらない復讐心から出ていることを示している。このコンテキストでは直接的な関係はない言葉であるが、古典から学ぶことを大事にする立場からすれば、16世紀のキリスト教社会がギリシャ古典に学ぶことが多くあることを言外に示そうとしてここに挿入した可能性は考えられる。

21 『警句・格言集』第3巻、XXIV 番に、全く同じ話があり、この対話はそのからの引用と考えられる (op. cit. p. 157-158)

れません²²。しかし、だからといって次のような記録が取るに足りないようなものだとも思われません。つまり、あるレントウルスという人が老カトーの顔に唾と痰を吐きかけた時、カトーは次のこと以外に何も答えなかったというのです。「今後、私はこう答えよう。あなたに口が無いというのは嘘である」と。つまりラテン語では恥を知らない者には表情が無いということですし、このように冗談は言葉の曖昧さから生まれるものなのです²³。

Aem: それぞれにお気に入りのものがあるものですね。優れた警句の中で私の気に入っているのは、敵に報復する最良の方法を問われた時に、ディオゲネスが語ったといわれる言葉です。彼は言っています。「自分を出来るだけ有徳で、誠実であると誇示することです」²⁴と。こんな思慮を心の中に引き起こすのは、神しかいないと私は本当に驚くのです。ところで、アリストテレスの言葉にもパウロの教えと大いに一致するところがありますよ。ある人から、彼の哲学が彼にどのような果実をもたらしたのかと問われた時、アリストテレスは「多くの人たちが強制の恐れから行っていることを、私は望んでするようになりました」と答えています。パ

22 アウグストゥス時代の偉大な詩人ヴェルギリウスの言葉の引用。彼が言っているのは、他の国々が芸術と学問の名声を得ようとするのと違い、ローマは平和と文明をもたらす使命があるという。そのため、負かした者に気を使い、傲慢な者を打ち倒すのだという。

23 Marcus Porcius Cato、厳格な道徳、政治的信念、軍事的経歴、文学的才能で有名であり、最初はギリシャ文化を導入することに反対していたというが、年老いてからはギリシャ語も学んでいる。プルタルコスによる伝記では、その畜衛が厳しく非難されている。ここで扱われているカトーの故事は、『警句・格言集』第5巻に老カトーの言葉が集められており (op. cit., p. 260-264)、その中に収録されている (p. 263-264)。その中で、ラテン語の Os という同一単語の持つ二つの意味を説明している。つまり、「口」という意味と「顔」という意味であるが、「顔み深い容貌」とその反対に「生意気な言葉」「厚かましい行為」をも意味している。ここではその言葉の面白さを表現している。また、このカトーの故事と同様なものとしては、ディオゲネスの話があり、その両方をセネカの「怒りについて」の中に見ることが出来る。茂手木元蔵訳『怒りについて』(第3巻、38)、岩波文庫、1980、175頁参照

24 これはディオゲネスの言葉を集めた部分 (LB. Tom. IV. op. cit., p. 172-192) の中に含まれて (p. 191) いる。

ウロは、キリスト教的な愛を注入された人は、もはや律法に隷属していない。なぜなら、律法は罰への恐れで彼らを捉えるが、彼らは自由に振舞っているのだと教えています²⁵。

Fra: キリストが取税人や罪人と食卓の交わりをしているのを見て、ユダヤ人たちがつぶやいたことに対して、健康な者には医者は要らない、要るのは病人であるとお答えになっています²⁶。これは、ブルタルコスがフォキオンのことを語った内容と決して相容れないものではありません。つまり、憎むべき非道な人間が法廷で親切からというよりも機知に富んだ仕方では保護されたことが非難された時、彼はこうっていますよ。「よくない人間にこそ、このような保護が必要じゃないのかね」と。

Gyr: それこそ永遠の父の例にならったキリスト教的善性の模範といえますね。太陽がよい人だけでなく、よくない人の上にも昇るように命じられたように、善人にも悪人にも親切をなさるのです²⁷。

しかし、一人の王様が持っていた寛大さの例にはもっと驚かれることでしょう。デモステネスの甥デモカレスがアテネの使節としてマケドニア王フィリップのもとに赴き、彼の求めていたことを成し遂げて後、彼は王のもとを引き下がることとなります。何か他にも望みがあるか、と優しく問いかけられたデモカレスは「あなた自身が首を括ることだ」と、怒りに満ちた声で叫んだのです。罵声を浴びせられたのは王様であり、

25 アリストテレスの言葉を集めた警句集 (op. cit., p. 337-339) 中の言葉 (p. 339)。Percontanti quid lucri cepisset ex Philosophia; *Ut ea, inquit, nullo imperante faciam, quae vulgus facit metu legum.* Idiota a furto abstinere, quia lex minatur poenam: Philosophus abstinere, quia per se turpe est, etiamsi liceat impune. (哲学からどんな利益が得られたのか訊ねられて、彼はこう言った「人々が律法への恐れからなしていることを、私はどんな命令によっても行いはしない」と。無知な者はひそかに自制する、というのは律法が罰で脅しているからである。哲学者が自制するのは、例え自由にすることが許されていても、自ら恥じるからである)。また、パウロについての言及は他の対話（「聖なる饗宴」「魚喰い」等）にも見られるが、それはキリスト教的な自由とエラスムスが呼んでいるもの、あるいは律法主義に対する自由の解釈である。パウロの言葉はローマ書6-7章の理解。

26 マタイ 9:10-12、これについては「聖なる饗宴」でも取り上げられる。

27 マタイ 5:45

尊敬すべき方だったのです。しかも、彼は少しもカッなることなく、デモステネスの同僚に向って言ったのです。「あなた方はこのことをアテネの人民に伝えてください。知らされた事実からして私たちのいずれが優れた者であるか判断してください。忍耐してこれを聞いた私なのか、それともこういうことを語った人なのか」²⁸と。ところで、今や、自分を神々と等しい者と考えたり、酒宴の中で語られた言葉によって狂暴な戦争を引き起こすような地上の暴君がどこにいますでしょうか²⁹。

Hie: 名譽欲というのは大きな力を持っていますし、それが多くの人を迷わせてしまうのです。ある人が、ソクラテスに最も栄光に満ちた名声に到達するための近道を訊ねたというのです。彼の答えは「そのような力に捉えられていることをあなた自身が証明しているではありませんか」というものでした³⁰。

Iac: 確かに、これほど端的、完璧な言葉を聞いたことがありませんね。名声は得ようとして求めるものではなく、邪悪に悪評がついて回るように、その人の徳に自然についてくるものです。

皆さんの驚くような人達がありますよ。私はスパルタのある少女の話が気に入っているのです。彼女が競売で売りに出された時のことですが、ある競売人が近づいて言ったのです。「もしわしがお前さんを買ったとしたら、お前さんは将来善い人間になるかな」と。すると、その少女は「たとえ、あなたがお買いにならなくても」と答えたのです。つまり、

28 『警句・格言集』第4巻の内、マケドニアのフリップに関するもの (op. cit., p. 191-196) で、この話はその35番 (p. 196) にあり、セネカの『怒りについて』第3巻23に示されている王の言葉と同様、次のようになっている。「このようなことを言う者は、その言をじっと聞いて仕返しもしない者よりも遙かに傲慢である、と」(茂手木元蔵訳、前掲書、152頁参照)

29 上の文脈と直接関係の無い間いかけであるが、フィリップの話に関係付けて、エラスムスの時代の無益な戦争を引き起こしている者への警告あるいは痛烈な皮肉を語っている。古典的な文章の間にこのような同時代に対する警句を挿入するのはエラスムスの特徴である。

30 『警句・格言集』第3巻最初のソクラテスの言葉を集めた部分からの引用 (op. cit., p. 156)

彼女は誰かのために誠実に仕えるというのではなく、徳それ自体が求めているから、本性的に徳を志すということを意味しているのです³¹。

Lau: その少女は全く力強い言葉を発したものです。その他に、運命に対していくらかでも志操堅固であろうとする立派な例もあるように思えるのです。マケドニア王フィリップが、ある日三つの非常にうれしい知らせを受けたのです。一つはオリンピックで勝利したこと、二つ目は軍隊の指揮官であるパルメニオンが戦闘でダルダノスに勝利したということ、そして三つ目は妻のオリンピアが彼の子を産んだということでした。すると、彼は天に手を差し上げてこう祈ったのです。「神は小さな不幸で、こんなに大きな幸運を贖うことをお許しになられた」³²と。

Alb: 今日では、誰かがその妬みを恐れるほど大きな幸運というものはありません。むしろ、もし人が幸運にめぐり合うとすれば、あたかもネメシス³³が死んでしまったか耳が聞こえなくなったかのように自慢して固るので

31 この話は、徳とスパルタ女性の簡潔な言い回しを集めたものの中に見られるものであるが、エラスムスの『警句・格言集』では (op. cit., p. 138)、Alter quum venderetur, rogatus a licitatore, eris ne frugi si fuero mercatus; *Etiā si non fueris mercatus*. Ne fortuna quidem servilis docere potuit illum servilia loqui. Qui enim natura probus est, ubique et apud omnes probus est. (売りに出されたある人が競売人に訊ねられた。もしわしを買ったら家政上手になるかな。「あなたが買わなくとも」と。自分が有益であると語ることで有益であると教えることができるのは決して幸せではない。というのは、本性的に有徳な者は、どこでも誰のところでも有徳だからである) と、ここでは女性でなく男性として扱われている。

32 注28同様、マケドニアのフィリップに関するもの内、2番 (op. cit., p. 191) にこの内容が紹介され、その後次に説明が加えられている。Vir cordatissimus non insolenter gestiit ob rerum successum, sed fortunae indulgentiam suspectam habuit, cuius ingenium esse novit, ut quibus exitium molitur, his prius nova rerum prosperitate blandiatur. (最も賢明な人は順調なことに過度の喜びを表さず、運命の祝福を疑ってみるのである。それによって災禍が働くというその本来の姿を知っているからであり、むしろその順境によって新しい事態をおびき寄せるのである)

33 人間の思い上がりという神々に対する無礼に対し神の憤りと罰を擬人化した女神で、ヘシオドスによればニュクス(夜神)の娘である。フィリップの賢明さの対極にあるエラスムスの同代人への警告と受け取ることが出来る。

さて、このご馳走が皆さんのお気に召したようでしたら、この庭園は何時でも皆さんのお望みのたびごとにご馳走を提供してくれることでしょう。皆さんがお話になった対話は、とても喜ばしく豊かなものでしたから。

Bar: 全くです。アピティウス³⁴でさえもこれ以上おいしいお皿を食卓に供することは出来なかったでしょうよ。ですから、たびたび私たちを招待してください。今、私たちが用意したものをあなたは喜んでくださいましたが、それはあなたの耳に相応しいものとは思えません。なぜなら、それは前もって良く準備されたものではなく、心に思いついたものだからです。よく考えられたもっと善いものを準備することにしましょう。

Alb: それは有難いことですな。

34 ティベリウス時代のローマの食通で有名な贅沢者として知られている。日本で言えば紀伊国屋文左衛門の贅沢が諺として用いられるように、贅沢な食事に関して諺として用いられる。